



「冬の奥多摩山」

木版画…安藤修一

～ 季節 だより ～

冬の樹木ウォッチング

山は今、木々の葉を落として眠りについています。

この時期、樹木、特に落葉広葉樹の樹種識別（同定）は困難を極めます。

そんな冬でも、樹木の観察や森林内の散策を楽しみたい方のために、冬の樹木ウォッチングについての話題を提供しましょう。

1 幹と枝

この視点で樹木を観察した場合、その姿が大きく異なるのは、針葉樹と広葉樹でしょう。

針葉樹は例外なく幹と枝がはっきりとしています。広葉樹の中にも幹と枝がはっきり分けられる樹木もありますが、どこまでを幹といい、どこからが枝というのかが判然としません。多くの場合、はっきりと幹と呼べる部位は、根元から数メートルの高さまでの現象に留まっているようです。

その点、針葉樹は、葉を繁らせ光合成による栄養作りを分担する枝と、樹木本体を支えると同時に、より

陽光を受けやすい高所まで伸びる幹とで、役割分担が明確です。

2 枝の付き方

葉の付き方（葉序）の代表的なものは、互生、対生、そして輪生でしょう。このほか、束生（頂生）と呼ばれ、短枝の先にまとまって付くものもあります。

枝の付き方にも、互生、対生、そして輪生などがあり、それらが樹種により決まっているので、落葉して枝だけになる冬季においては樹種識別の大きなポイントになります。

針葉樹、広葉樹に関係なく、多くの樹種は互生ですが、中には対生、さらには輪生も見られます。

針葉樹で輪生する樹種は、モミの仲間、トウヒ、アカマツなどですが、幹からの枝の出方と小枝の付き方は関係ないようで、これらの樹種の小枝は対生です。

針葉樹ほど明確ではありませんが、広葉樹で輪生する樹種は、ヤマグルマ、ミズキなどです。特に、ミズキの階段状に枝を張る姿は、葉を落とした冬季においても識別の大きな要素となります。 … 次回につづく …

3 枝ぶり

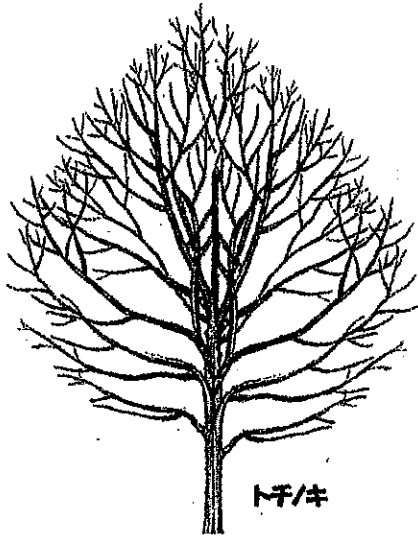
枝ぶりとは、ここでは、同じ輪生でも枝が斜上するウラジロモミと、ほぼ水平に張るモミヤトウヒなどの様子の違いを表す言葉として使います。

樹皮がそっくりで、葉を観察できない冬季における識別が難しい樹種に、ブナとコシアブラ、リョウブとナツツバキがあります。これらは、同じような環境下に育っているため、識別に苦労する人が多いようです。

これらの識別のポイントが枝ぶりなのです。ブナは小さな葉ですので枝ぶりは細やかとなります。先端まで細い枝が付きます。これに比べて、コシアブラは大きな掌状葉を付けるため、大雑把な枝ぶりとなります。

また、リョウブは、葉の1枚1枚はそれほど大きくないのですが、短枝の先に葉をまとめて付けるため、枝ぶりは大雑把となります。これに比べて、ナツツバキは、小さな枝先に小さな葉を付けるため、細やかな枝ぶりを見せます。

また、広葉樹の多くが枝を斜上させますが、ヤマボウシ、ガマズミ、ヤブデマリ、そして既述のミズキなどは、ほぼ水平に枝を張り出します。花期には、その枝の上に花を持つため、その特徴をはっきりと観察できます。



4 幹の様子

(1) 樹皮

「褐色」、「灰黒褐色」、「灰褐色」、「黒褐色」、「帯黄褐色」、「暗褐色」、「濃褐色」そして「緑褐色」。

これらは、手元の樹木図鑑で拾った樹皮の色を表す言葉です。「いったい、どんな色?」、「いったい、どこがどう違うの?」と言いたくなるような類似した言葉が並んでいます。

この説明に代表されるように、私たちにあって、葉や花などの説明に比べ、樹皮の色の説明は分かりづらいようです。さらに、樹皮の文様や皮目などの説明も、文章だけでそれを想像することは至難の業です。

そうは言っても、中には、樹種を特定しやすいような特徴的な樹皮もありますので、いくつか例を上げてみましょう。

その一つが、コルク質が発達している樹種です。コ

ルクの代用品を作るアベマキは奥多摩では見られませんが、クヌギも見かけませんが、それら以外でいくつか見られますので紹介しましょう。

コルク質の樹皮を持つ樹種には、ハリギリ、キハダ、コナラ、そしてヨコグラノキがあります。このうち、ハリギリとキハダは、ある程度の太さ(径20cmぐらい)にならないとコルク質は発達してきません。また、コナラは大径木(老樹)にならないと、この特徴は出てきません。逆に、径が10cmに満たなくても、ヨコグラノキにはコルク質の樹皮が発達します。石灰岩地帯でコルク質の樹皮を持った細い樹木をみたら、まず間違いなくヨコグラノキでしょう。

次に樹皮の剥がれ方です。樹皮は、成長により人間の皮膚と同じように更新されていき、その過程で剥がれ落ちます。多くの樹木ではその瞬間を確認できませんが、いくつかの樹種において、その剥がれ方に特徴が見られます。

シラカバとダケカンバは、横に薄く紙状に大きく剥がれます。また、アサダは縦に短冊状に剥がれ、オノオレカンバは3mm程の厚さを持った固い樹皮を、方向に関係なく剥がします。大径木となったトチノキでも同様な現象が起こり、その痕跡が樹皮に独特の文様(斑紋)をつけます。

リョウブとナツツバキは、樹皮の剥がれた痕が同じような美しい文様となりますが、この文様だけでは特定は困難です。しかし、他の樹種の樹皮と比べると、明らかに異なりますので、この2種に絞り込む際にヒントとなるでしょう。

(2) 幹

樹木の幹は、基本形は真円です。この形が「折損」に対する抵抗力が最も強いからなのでしょう。

そして幹は、針葉樹に代表されるように、基本的には鉛直方向に育っていきます。ところが、急斜面に育つ広葉樹では、陽光を求めて谷側に傾いて育つ場合があります。そんなとき、幹の断面は真円にはなりません。折損に対する抵抗力を付けるために、幹の山側が異常に張り出していきます(この状態を「峰が張る」といいます。)

樹木、特に冬の樹木の観察においては、単に樹種の識別だけでなく、樹形の違いやその理由などを考えながら歩くのも一興ではないでしょうか。

(堀越弘司)



～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その14 ～

「トムラウシ山大量遭難」

毎年、山岳地帯を持つ都道府県が持ち回りで開催する「全国山岳遭難対策協議会」は、今年（平成 21 年）の開催地が東京と決定しており、7月17日、代々木の「青少年オリンピック総合センター」に全国から山岳関係者が集まった。文部科学省や警察庁などが主催するこの会議で、1年ぶりに会う懐かしい顔も見られたが、どの顔もどこか落ち着きがなかった。その原因は東京に本社のあるA社が企画した「北海道大雪山系トムラウシ山ツアー登山」で、昨日大きな遭難事故があり、いまもその救助の最中らしいが、その詳しい情報が入らず誰もが心配しているのだ。

会議途中の休憩時間には、各県の代表や岳連関係者などが寄り集まって、今までに入っている情報の交換をしていた。「4人の死亡を確認したらしい」とか「美瑛岳でも遭難が起きているらしい」などの情報もたらされた。

そして夕方、会議が終了する直前になって大雪山系での遭難件数は3件、犠牲者はトムラウシ山で9人（ツアー8人、単独行1人）、美瑛岳で1人の死者が出たことが判明した。

皮肉にも、全国の山岳遭難救助隊や遭難防止機関のメンバーが一堂に会し「夏山登山の事故防止」の呼びかけを採択している最中に、日本の夏山遭難史上最悪ともいえる大量山岳遭難事故が発覚したのである。

このトムラウシ山の事故は、11月の今になっても検証結果が明らかになっていない。日本山岳ガイド協会では、事故の検証と再発防止のため、専門家ら6人の委員からなる「事故調査特別委員会」を発足させたというし、北海道警察も「業務上過失致死」容疑での立件も視野に入れ、解明を進めているというから、いずれ事故の全容が明らかにされることだろう。

本来登山とは、個人のチャレンジであったから、自分たちの体力、技術を考え、山の地形やルート、難易度などを調べ、想定される気象条件と、それに合った装備、資材を自らの手で準備し、挑戦する困難な山に対処するための努力を怠らなかつた。だからこそその困難を克服し、自分たちの力で登頂したり踏破したときの達成感や喜びは大きかった。

それが、いつの間にか登山者の高齢化が進み、百名山ブームなども拍車を掛け、登山が商業行為

の中にも進出していった。ツアー登山という営利事業で、経済的には登山を商品化し、販売するというビジネスも定着した。

平成 19 年の1年間に、ツアー登山の利用者は延べ約 30 万人あったという。需要があるから、年々山深くまで入り込み、高度な登山技術を要する場所までガイドする。加熱していくツアー登山を見て、大きな事故を心配する声も少なくなかった。事実過去には羊蹄山や十勝岳などにおいてツアー登山の事故も起きている。

今回の悲惨極まりない大事故も、企画したツアー会社、引率した山岳ガイド、応募した登山客。これら3者の主張には、その責任に対しそれぞれの思惑が見られた。

ツアー会社はマスコミの取材に対し「すべて現場の判断」との言葉を繰り返していた。

ツアー業者にとって停滞などの日程遅れ、ツアーの変更、中止などが及ぼすデメリットの大きいことはわかるが、緊急時に行程変更などの十分な対応は用意されていたのだろうか。

引率ガイドの資質については、日本では法律上誰もが登山のガイドや引率ができ、ツアー登山引率者の資格に関する法的制限はない。だからガイドの質もピン、キリであることは誰もが認めている。

もちろん今回の大量遭難は、悪天候が原因で起こった、いわゆる気象遭難といえようが、なぜ避難小屋に引き返さなかつたのか。風速 20～25メートルの中、雨に濡れ強風にさらされる事がいかに恐ろしい事か。低体温症の知識がなかつたのか。登山道上でパーティはバラバラとなり、結果として比較的高齢（61歳）のガイド1人と、客（66歳）男性1人、基礎体力のない女性6人が犠牲となった。死因はすべて低体温症からくる凍死であった。パーティの分裂は最悪の事態を生むということを経験した遭難事故ではあつた。

ツアー客はどうだったのか。荷物をそろえ、指定された場所に行けば、そのままバスで目的地に運んでくれ、山の頂上までガイドしてもらえるツアー登山は、中高年登山者に人気が高いという。山は非日常の世界である。もちろんガイドにはツアー客の安全を確保する安全配慮義務がある。だからと言って何から何までガイドまかせという他人依存の考えではこんな遭難事故も起こり得るという警鐘でもあつたらう。

自然とはこういうものだということを登山界

にたたきつけたトムラウシからのメッセージだったような気がする。

「真名井沢に転落死」

9月23日早朝、「奥多摩の山に行ってくる」といって神奈川県K市の自宅を車で出た登山者Nさん(46歳、男性)が翌日になっても戻らず、地元警察署に捜索願が出された。

翌日から山岳救助隊はNさんが乗って出た車の捜索を行ったが、五日市警察署の山岳救助隊が車を発見したという情報が入り、Nさんは五日市署管内の山に登っていると考えられることから、当署の山岳救助隊は捜索を打ち切った。

ところが30日になって、五日市で車発見の情報は誤報と判明した。再度当署管内の駐車場や林道などの捜索を開始したところ、真名井林道に停まっているNさんの車を発見した。

車は鍵を掛けて真名井北稜の登り口に停めてあり、真名井北稜から川苔山に登ったものと思われた。Nさんが行方不明になってからすでに1週間経過しており、厳しい状況ではあったが直ちに山岳救助隊を招集し、2個班に分かれて真名井北稜と赤杭尾根を捜索した。しかし夕方下山した両班とも何の情報も得られなかった。

真名井北稜は登山地図などでは正規の登山道として扱われていない。昭文社の5万分の1登山地図ではグレーの破線で表記され、登山コースではない小道とされている。

しかし最近では通常の登山道に満足しない登山者が、よりスリリングなバリエーションルートとして入り込むことが多くなった。登山コースではないので役所では整備していないから、そういう場所での道迷いによる事故も多い。

翌10月31日は浮遊臭気に反応する警備犬2頭も含め、4個班体制で真名井北稜を中心に両サイドの沢、北側の大丹波川支流と南側の真名井沢を重点とする捜索に入った。

私は藤田、川津両隊員と大丹波川上流の枝沢を登り、広い尾根に取り付いた。踏み跡は途中で消えてしまったが、そのまま尾根を登り続け、1時間ほどで真名井北稜に登り上げた。稜線上はガスって視界がきかなかつたが、このまま真名井北稜を上まで詰めようと登り出した。

しばらくして南側の真名井沢を遡行している2班の橋本小隊長、渡辺隊員組が無線で警視庁を呼び出し緊急連絡を入れている。「真名井沢の上流部で男性登山者の遺体を発見した」というものであった。いま捜索している遭難者本人であるかどうか所持品などを確認中だという。

私達も北稜を上を急いだ。2班から続報が入った。「死亡している男性は、所持品から行方不明になっているNさんと思われる」という。

途中支尾根の分岐で、上から降りてくる3班の3人と合流した。そこは上から降りてくると尾根がふたつに分かれ、いま私達が登って来た左に急に落ち込む尾根が正規のルートなのに、真っ直ぐ真名井沢に向う尾根が北稜ルートのように見える。踏み跡もあるから、Nさんは誤ってこの尾根を辿ったものだろう。下山の際の最も迷いやすいケースだ。支尾根を下っていくと途中から尾根は狭まり急になってくる。真名井沢が見える辺りまで来るとザイルなしでは降りられなくなった。ここまで来ればNさんも迷ったことに気付いたはずだが、登り返すことをしなかった。そのまま無理してでも沢に下降する。そして滑落。道迷い遭難に最も多いパターンである。下の沢の中に、Nさんを発見した2班の2人も見え、声も聞こえてきた。私達はザイルをセットし、急な尾根を真名井沢まで下降して2班と合流した。

Nさんは尾根の末端から30メートルほど下流の真名井沢に、両足を水に浸けて仰向けに倒れていた。左岸の急なルンゼ状に滑り落ちた痕が20メートルほど続いていた。Nさんが行方不明になってから、すでに1週間以上経っている。残念な結果となってしまったが、これでなんとか家族の元には帰すことはできる。

Nさんの亡骸に手を合わせ、収容方法を考える。すでに午後2時を回っている。警視庁航空隊の活動を要請はしたが、上空は相当にガスが濃いし、谷も深く、辺りは樹林に覆われている。ヘリで吊り上げできるかどうか不安があった。沢の中を担架で降ろすことになれば、夜までかかる可能性もある。

心配をよそにヘリのローターの音が聞こえてきた。警視庁航空隊救助用ヘリ「おとり7号」でホイストするという。少し高台に空が望める場所があったので、その雑木を少し伐採させてもらい、そこから吊り上げることにした。

航空隊員が1人下降して来て、担架にNさんの遺体を乗せ、狭い谷の上空でホバリングしている「おとり7号」に吊り上げ、無事収容したのは午後3時20分であった。

ヘリのおかげで、暗闇の沢を担架搬送することだけは免れた。それでも警備犬なども連れ、真名井沢出合に下山したのは午後5時を過ぎていた。Nさんは今年2人目の遭難死者であり、初心者にありがちな山岳遭難事故であった。

(青梅警察署嘱託員 山岳指導員 金 邦夫)

～行ってまたおよ～

紅葉の鹿倉山

天気にも恵まれた山行日和でした。参加者40名。「奥山に紅葉踏み分け 鳴く鹿の 聲きくときぞ秋はかなしき」と小倉百人一首に詠まれているような秋の感じがしました。

登り始めから、急峻な坂をゆっくりゆっくり大勢の方々と同行。森の中では、逆光に紅色や黄色の木々がまぶしく映え、遠くにヒガラや名前を知らない小鳥のさえずりに心癒されました。

足元には、コナラやミズナラの笠の付いたドングリや、笠の取れたのがありました。誰かが、「このドングリは大きいね」と…。

しばらく歩いて、別の方が、風に舞う落ち葉に「まあ綺麗!」、口々に「本当、本当!」。次に「この大きい葉はホオ葉だよな?」。初めての組み合わせのメンバーでしたが、歩きながらのおしゃべりに花が咲きました(秋なので、実際の花は少なく、コウヤボウキが咲いていました。)

鹿倉山へ行く途中の大寺山山頂のリンドウは、

あいにくつぼんだ花が多かったのですが、陽当りの良い所では可憐に咲いていました(踏み潰しそうで要注意!)

サブリーダーに、針葉樹のモミ、カヤ、ツガの違いを伺い(なるほど)、コシアブラやタカノツメの若葉が食べられる事に感激しました。

子どもの頃、南の島で育った私には、紅葉や雪は無縁のものでした。その頃、文通生から送られたイチヨウやモミジの葉は珍しく大事にとっておいたのを覚えています。だから、今でも紅葉には思い入れがあり、何枚か拾って持ち帰り、絵手紙にして親しい人たちに送りました。へたな句を添えて、「もみじ踏み 花札浮かぶ 鹿倉山」おそまつ。

話し変わって、下りの途中、右手に炭焼き窯の跡を見つけ、先人の暮らしに思いを馳せました。

他に鮎玉の小袋を拾い、空き缶を拾い、壊れたビニール傘を拾い、「山をきれいに。ゴミを落とさないで。落ちているのを見つけたら拾って欲しい。」と願いながら下山しました。

(新垣勝子)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(16)

日原に「雲取(くもとり)」という小字があります。雲取山の東側に葉状に下がる地籍で、「檜尾(ひのきお)」境の野陣尾根から「長沢」境の大雲取谷とその支流六間谷を登りつめた間の地域をいいます。地名の謂われは、雲取山を取り巻く谷から立ちこめる雲を手掴みで取れるような場所という意味です。

武蔵名勝図会には、「大雲取山(中略)、このあたりは、悉く高山なれど、わけてこの山は峻峰(しゅんぼう)にして雲をも手に取るが如く思ふというより斯(かく)は号するなり。」とあります。

むかしの奥多摩は、居住地をとりまく山や川に依存して生活していました。特に日原地域の自然は厳しく、そのかわりに動植物の宝庫でもありました。むかし日原には、山の獺や川の漁を生業(なりわい)とする人たちがいて、それにまつわる話のいろいろと残っています。2月5日は、釣師たちの水神まつりがあり、3月17日には、獺師たちの鉄砲まつりがありました。

憲一郎爺さんは、鉄砲も釣りも名人と言われた人で、爺さんから聞いた話ですが、「日原の奥谷で、い

きなり大熊に出っくわしたので、鉄砲を撃ったが急所をはずしてしまった。弾丸を詰め替える間もなく熊の顔が目の前に迫ってきた。慌てて尻尾でひっぱいたら、熊が腹へ噛みついてきた。こっちも夢中で取っ組んだが、そのまま藪の中を転がって、下の窪で止まったのはいいが、熊が上へのっかかっているうちにさっさもいかねえ。力まかせに熊の腹をけり上げると、唸りながら転がっていった。こっちは恐ろしさと寒さで焚き火にあたって夜明けを待ったが、いい按配に、熊は下の笹藪の中に倒れていた。たっけよ。」というように、命がけで大物を仕留めて生計を維持していたのです。

また、川の漁をする人も、旅館や料亭から注文があれば、型の揃った山女魚(やまめ)を期日まできちんと納めたということです。

むかしは、小川谷橋から奥へ入る時は、「期日、何処の沢、誰々」というように、各人が名札を掛けて漁に入る沢を告示して、漁師どうしが狭い谷でかち合わないよう、取り決めていたのです。

【資料】奥多摩町誌、日原風土記、広報おくたま
(岡部義重)

ガイドだより ～奥多摩湖いこいの路～

奥多摩湖バス停で降り、小河内ダムを渡り切った場所に、「奥多摩湖いこいの路」の入口があります。

このコースは、平成19年4月に、一般の方が歩けるように整備され、「山のふるさと村」までの約12kmが開放されました。冬季は通行止めとなります。

この遊歩道は、200m毎に標識が立っており、歩き始めると、約1.8km(約30分)ほど先で、以前、山から伐り出した材木を集めた場所(土場)があった所に着きます。

ここから道は狭くなり、約4.5km(約1時間30分)ほどで「いこいの広場」に到着します。ここは、トイレやベンチ、あずまやがあり、昼食や休憩の場所となっております。

ここから、約6km(約2時間)ほどで「山のふるさと村」です。山のふるさと村には、自然体験が出来るビジターセンターと、木工や陶芸、そして、そば打ち体験が出来るクラフトセンターやキャンプ場があります。

小鳥たちの声を聞きながら、セラピー(癒し)効果がある針葉樹や広葉樹の林の中を歩くこのコースのお奨めの季節は、春と秋です。

春は、サクラ、ツツジ等の花が見事です。薫風さわやかな葉桜(新緑)の時期には、いい空気を吸いながらのウォーキングで、健康増進が図れます。

秋には、ケヤキ、アブラチャン、イタヤカエデの葉が黄色く色づき、イロハモミジ、メグスリノキ等が紅色に色づいて美しいです。特に、湖面に紅葉が映り、木漏れ日の射す中、落ち葉を踏みしめて歩く感触は、皆さんを幸せな気持ちにさせてくれます。

「いこいの路」は、「山のふるさと村」までですが、この後、さらに2kmほど進むと浮橋があり、それを渡り湖畔に上がったところが「小河内神社」のバス停です。



このコースは、アップダウンもあまりなく、長距離を歩きたいと思っている方にはお奨めのコースです。

なお、「小河内神社」バス停からスタートして、浮橋を渡る逆コースでは、「奥多摩湖」バス停から奥多摩駅行きのバスも多く、帰りの時間をあまり気にしないで歩くことができます。(富山敬夫)

施設案内

◆ 奥多摩ステーションギャラリー・そばの花

奥多摩駅舎2階には、ステーションギャラリーがあります。

駅舎の造りと調和した木目のやすらぎをふんだんに活かした内装には、奥多摩を感じさせる作品が展示されています。

また、併設されている「お食事ギャラリーそばの花」で、窓から山並みを見ながら手打ちそばが美味しくいただけます。

手打ちそば(うどん)…500円

田舎風ざるそば(うどん)…500円

山菜そば(うどん)…600円

そば入り団子おしるこ…300円

コーヒー…300円、生ビール…500円

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、植物が目覚め始める春先からイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

- ① 3月26日(金) 海沢のカタクリと史跡探訪
応募締切日 3月6日(ハイキング)
- ② 4月2日(金) 元禄時代の数馬の切り通し
応募締切日 3月18日(ハイキング)
- ③ 4月9日(金) むかし道に春の植物を訪ねる
応募締切日 3月18日(ハイキング)
- ④ 4月10日(土) 山開き前夜祭
当日、氷川キャンプ場に、お越しください。
- ⑥ 4月11日(日) 山開き式
当日、奥多摩駅前に、お越しください

募集人員：④、⑥を除き、各回30名、

参加費：①～③…500円、④…1000円

次号は、平成22年4月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会